

自分の生活に重ね、生き方を見つめる子どもを育てる道徳科学習指導 ～多様な考えを引き出す発問の工夫を通して～

要約

現代社会においては、グローバル化がますます進み、様々な背景や要因のもと、自ら感じ、考え、他者と協働しながらよりよい方向を目指す「生きる力」が求められている。人が互いに尊重し協働して社会を形づくっていく上で共通に求められるルールやマナーを学び、規範意識などを育むとともに、人としてよりよく生きる上で大切なものは何か、自分はどうのように生きるべきかなどについて、考えなければならない中で、自分とは関わりがないと感じ、実際の自分を見直すことができずその後の生活に生かすことができていない子ども多いことが分かった。そこで、子どもが道徳的価値の理解をもとに自己を見つめ、主体的に考えることができるようにするためには、自らその事象に自分事としてあらゆる角度から考えていく道徳科の学習指導を考えた。

そのために、道徳科の学習指導において、道徳的価値の理解を深め、多様な考えを引き出す効果的な発問と手立てを工夫すれば、自分の生活に重ね、生き方を見つめることができる子どもが育つであろうと仮定し、次のことに重点を置いて、研究を進めていくことにした。

- ねらいの具体化と教材の解釈
- 多様な考えを引き出す発問の工夫
(共感的な発問、分析的な発問、投影的な発問、批判的な発問)
- 自分と重ねたり、置き換えたりする支援の工夫

以上のことをもとにして、以下の主題（教材）で実践を行った。

- 検証授業① 主題名:わがままばかり していると A. 節度、節制(10月実施)
教材名:「かぼちゃのつる」
- 検証授業② 主題名:みんなとなかよく B. 友情・信頼(11月実施)
教材名:「二わのことり」

実践の結果、次のような成果と課題を得た。(成果○ 課題●)

- ねらいの具体化や教材解釈をすることによって、道徳的価値の理解を深める中心場面を絞ることができ、子どもたちにじっくり考えさせ、生き方を見つめることができた。
- 多様な発問の工夫をしたことにより自分の考えにとらわれすぎることなく、友達の考えも聞き、「もし自分だったら…」と重ねて考えることができた。
- 心情円グラフを使ったり役割演技を行ったりしたことは、自分に重ねる支援となり、子どもたちが漠然と頭の中で考えている人間的な弱さや迷いを、視覚化する上で有効であった。
- 低学年では、客観的に物事をみることに慣れておらず、様々な発問を設定しようとしたが、発問の意味を理解させることが難しく、課題が残った。
- もっと子どもの本音を引き出すような分かりやすい揺さぶりの発問をしてさらに道徳的価値の理解を深めていく必要がある。

キーワード ねらいの具体化 発問の分類

1 主題設定の理由

(1) 社会的要請・現代教育の動向から

現代社会においては、グローバル化がますます進み、様々な背景や要因のもと、自ら感じ、考え、他者と協働しながらよりよい方向を目指す「生きる力」が求められている。新しい時代に必要とされている資質能力は、生きて働く「知識及び技能」の習得、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成、学びを人生や社会に活かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養である。これらの資質能力を養うために、道徳教育は大きな役割を果たす必要がある。道徳の時間が、「特別の教科 道徳」と位置付けられた背景として、いじめ防止や他者と協働してよりよい解決策を生み出していく力を育成する道徳教育の重要性と、量的・質的な道徳教育の課題が挙げられた。道徳教育においては、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を前提に、人が互いに尊重し協働して社会を形づくっていく上で共通に求められるルールやマナーを学び、規範意識などを育むとともに、人としてよりよく生きる上で大切なものは何か、自分はどのように生きるべきかなどについて、時には悩み、葛藤しつつ、考えを深め、自らの生き方を育んでいくことが求められている。

(2) 児童の実態より

本学級の子どもたちは、初めての学校生活にも慣れ、新しくできた友達と一緒に仲良く遊んだり、元気いっぱい学校生活を送り楽しんだりする姿がよく見られる。道徳アンケート（6月実施）によると、「だれに対しても、思いやりのころをもつて親切にできますか。」という問いに対し、「あまりできない・できない」と答えた子どもたちは、36人中12人で33%となった。また、「自分の生活の仕方を見直しながら規則正しい生活をしている。」という問いに対し、「あまりできない・できない」と答えた子どもたちは、36人中15人で42%となった。この結果から、仲良く友達と過ごすことができても、思いやりの心をもって誰かを助けたり、相手のことを考えて優しく接したりすることが十分でないことが分かる。また、その結果として自分の生活をふり返り、よさや課題について見つめ直すことや、相手の喜びを自分の喜びとして受け入れられることの経験も不十分である。さらに、自分自身の生活に関し、善悪の判断も不十分であると考ええる。このことから、本主題を設定し研究を進めることは、他者と自分とのかかわりを見つめる子どもの育成を目指す上でも意義深い。

(3) 指導上の反省・問題点から

これまでの道徳科の指導を振り返ると、教材文の中に出てくる主人公の気持ちを考えることが主になっており、多面的・多角的な見方をさせることが不十分であった。また、自分とは関わりがないと感じ、実際の自分を見直すことができずその後の生活に活かすことができていない子も多い。そこで、子どもが道徳的価値の理解をもとに自己を見つめ、主体的に考えることができるようにするためには、自らその事象に自分事としてあらゆる角度から考えていく道徳科の学習指導へと改善していく必要があると考える。

2 主題の意味

(1) 主題「自分の生活に重ね、生き方を見つめる」とは

- ① 「自分の生活に重ね」とは、これまでの経験や体験をもとに道徳的価値について、自分との関わりで捉えることである。そのために、自我関与させることを大事にする。

富岡栄氏によると、自我関与とは、教材中の登場人物に自分自身を投影させて考えたり、自分との関わりで捉えてこれからの生活に生かしていこうとしたりすることであると述べている。

- ② 「生き方を見つめる」とは、よりよく生きるためにその価値と自分自身の体験やそれに伴う感じ方や考え方を想起したり、これからの課題を考え実現していこうとする思いや願いを深めたりすることであると考え。
- ③ 「自分の生活を重ね、生き方を見つめる子ども」とは、これまでの経験や体験をもとに道徳的価値について自分との関わりで見つめ、これからの課題を考え実現していこうとする思いや願いを深める子どもである。具体的に次の子どもの姿と考える。

- もし自分だったらと、自分の生活に重ねて考え、道徳的価値の理解を深める子ども
- 他者と話し合い、物事を一面的でなく、様々な視点から考える子ども
- 表現物を使って自分の考えを話したり、友達の話の聞いたりすることができる子ども
- これからの生き方の課題を考え、それを実現していこうとする思いや願いをもつ子ども

(2) 副主題「多様な考えを引き出す発問の工夫」とは

① 「多様な考え」とは、以下の項目を含む考えである。

- 1) 本音…自分の弱さや課題からの考え
- 2) 立場の違い…する側、される側の立場からの考え
- 3) 視点…自己、他者、集団の視点をふまえた考え
- 4) 行為の背景…道徳的価値の違い

例：「お年寄りに席をゆずる」という場面に出会った子どもたちはどんな考えをもつだろうか。行為の背景には、ゆずらなければと分かっているけど恥ずかしい、と考えるA児。きつそうだから優しくしてあげたいなといった思いやりから考えるB児。恥ずかしいけど思い切って勇気を出そうと考えるC児。このような子どもが何を重視するかによって考えが多様となる。

② 「引き出す発問の工夫」とは、資料や人物に対する多様な立ち位置を生かして発問を組むことである。

- A：共感的な発問…主人公の気持ちに共感し、それを想像する。
- 【主人公に自分を重ねる】～はどんな気持ちだろう。～はどんなことを考えているのか。
- B：分析的な発問…主人公の考え方やその意味を考え、そこから学ぶ。
- 【主人公を客観的に】～はなぜそのようにしたのか。そのことにどんな意味があるのか。
- C：投影的な発問…主人公に自分を置き換え、考え判断する。
- 【主人公に自分を重ね】自分だったらどう考えるか。自分が〇〇ならばどうするか。
- D：批判的な発問…主人公の考えに対して自分の考えをもつ。
- 【主人公を客観的に】〇〇したことをどう思うか。本当にそうしてよかったのか。

3 研究の目標

道徳科の学習指導において、多様な考えを引き出す発問の工夫をすることによって自分の生活に重ね、生き方を見つめる子どもを育てる指導の在り方を究明する。

4 研究の仮説

道徳科の学習指導において、道徳的価値への理解を深める発問の工夫を通して、効果的に以下のように手立てを工夫すれば、自分の生活に重ね、生き方を見つめること

ができる子どもが育つであろう。

- (1) ねらいの具体化と教材の解釈 (2) 多様な考えを引き出す発問の工夫
 (3) 自分と重ねたり、置き換えたりする支援の工夫

5 研究の内容と方法

(1) 研究の対象：小郡市立のぞみが丘小学校 研究対象学級：第1学年2組(36名)

(2) 研究の内容・方法

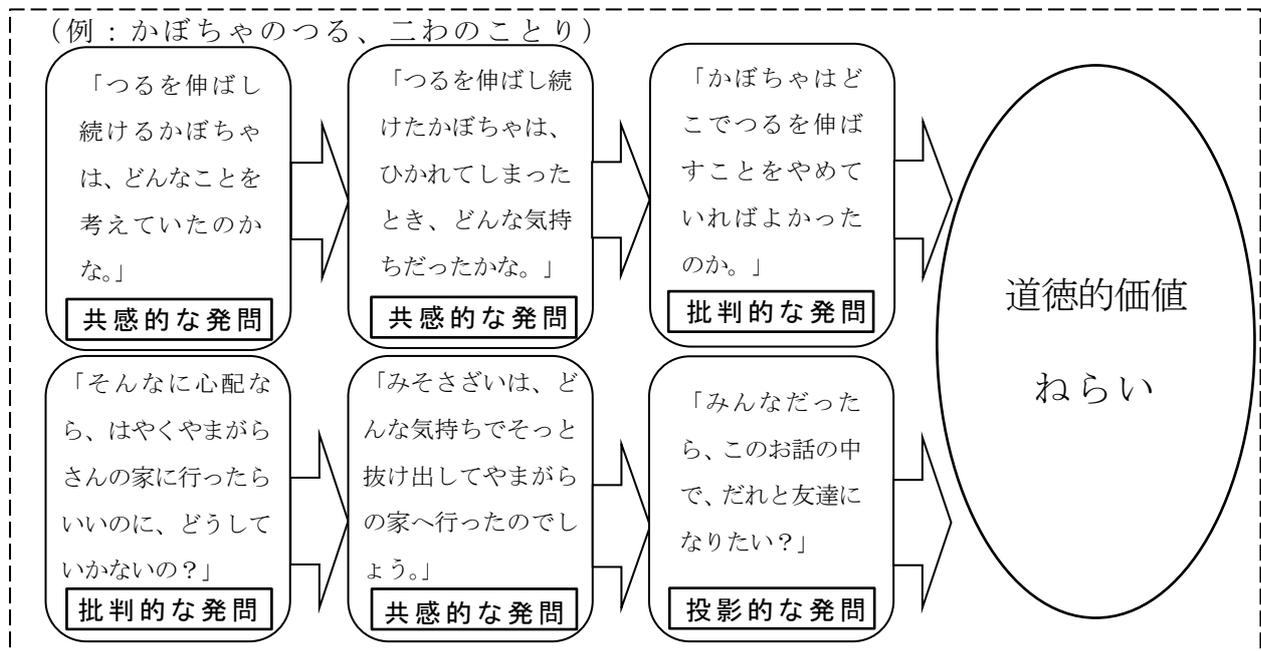
① ねらいの具体化と教材の解釈(例：教材名 二わのことり)

学年	第1学年および第2学年
内容項目	友達と仲良くし、助け合うこと
発達段階	友達と一緒に仲良くする楽しさ、助け合うことの大切さを実感させる
ねらい	友情とは、共に学んだり遊んだりすることを通して互いに影響し合って構築される関係であり、友達と同じ気持ちになって行動すると、相手も自分も嬉しくなることに気付き、友達と仲良くしようとする心情を育てる。
教材解釈	山奥のさびしい場所の友達の誕生日をお祝いしに行くか、楽しい音楽会の練習に行くか、友達のことを思いながらも自分の気持ちに揺れ、迷う気持ちを心の円グラフを用いて気付かせ、役割演技を行い、友達と同じ気持ちになって行動する大切さを捉えることのできる教材。

② 多様な考えを引き出す発問の工夫

道徳的価値の理解を深め、自己を見つめることができるようにねらいや教材に応じて、4つに分類した発問を組み合わせる。

(例：かぼちゃのつる、二わのことり)



③ 自分と重ねたり、自分に置き換えたりすることができる支援の工夫

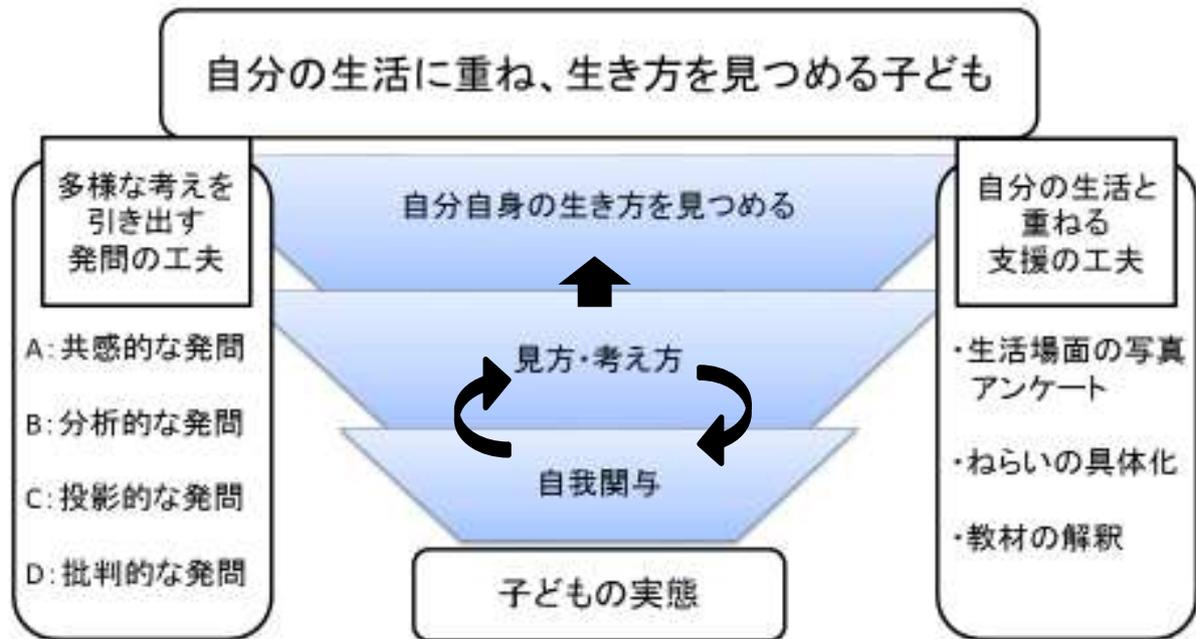
ア 自分と同様の体験を引き起こしたり、その様子を写真で見せて気持ちや思いを思い出させたりする。(写真提示)

イ 自分にも同じことはあったか質問したり、もしも自分だったらと問いかけたりする。(アンケートの実施と結果の提示)

6 研究の計画

月	研究計画	月	研究計画
5月	研究主題の設定	10月	検証授業①・仮説の見直し
6月	実態調査・観察	11月	検証授業②
7月	研究の構想	12月	研究のまとめ・報告書作成
8月	仮説の設定・教材研究	1月	研究のまとめ・報告書作成
9月	検証授業の指導案作成	2月	研究報告

7 研究の構想図



8 研究の実際

〈検証授業①〉第1学年 主題名：わがままばかりしていると A. 節度、節制 (10月実施)
教材名：「かぼちゃのつる」

(1) 本主題の指導にあたって

本主題の指導にあたっては、わがままばかりしていると他の人に迷惑をかけ、自分も困るようになることに気付き、周りの人のことも考え、自分勝手な行動はやめようとする心身を育てることをねらいとした。そのために、自分の経験を想起させた上で、物語の主人公になりきり、それぞれの気持ちにさせていくようにした。そして、自分自身の生活を振り返り、交流させるようにした。

(2) ねらいの具体化と教材解釈

学年	第1学年および第2学年
内容項目	よいことと悪いこととの区別をし、よいと思うことを進んで行うこと
発達段階	わがままするしない規則正しい生活をする大切さを実感させる
ねらい	節度・節制とは、心身の健康を損なうことのないような適度な程度で欲望などを抑え自己を制御することであり、わがままばかりしていると他の人に迷惑をかけ、自分も困るようになることに気付き、周りの人のことも考え、自分勝手な行動はやめようとする心身を育てる。 【かぼちゃのつる】

教材解釈	はちやすいかなどの注意を聞かずにわがままな振る舞いを続けていたかぼちゃが、あっという間にトラックに切られてしまったという内容であり、気持ちよくつるを伸ばす気持ちや注意を受けてもなおつるを伸ばし続ける気持ちに共感させながらわがままな振る舞いは相手も困るし、自分も困ることに気付くことができる教材である。
------	--

(3) 指導の実際

① 導入段階

自分だけではなく周りの人にも気を付けていることがあることを知らせるために、教師はアンケートの結果を提示した。

- ・スリッパやくつをならべる…15人 ・友だちに嫌なことをしないようする…11人
- ・ろうかを歩く…8人 ・学校で自分勝手なことをしないようにしている…30人

アンケートの結果を見た子どもたちは、自分から守っていることや頑張っていることを発表する中で、「でも、たまに廊下を走ってしまう。」や、「スリッパ並べていない人もいるよ。」といった声が上がった。

○考察

自分が気を付けていることについてのアンケートの提示したことは、子どもたちがよいことをしている自分を見つめる上で有効であったと考える。しかし、よいことだけ提示していたため、自分が見直すべき点についてまで振り返ることはできていなかった。

② 展開段階

つるをのばし、切られたかぼちゃの心情を考え、わがまましないことの大切さを気付かせることをねらいとした。そこで、教師は、主人公のかぼちゃの気持ちに寄り添うことができるように、登場人物の挿絵を使って表情に注目させながら、話を振り返り、「分かっているけどしてしま

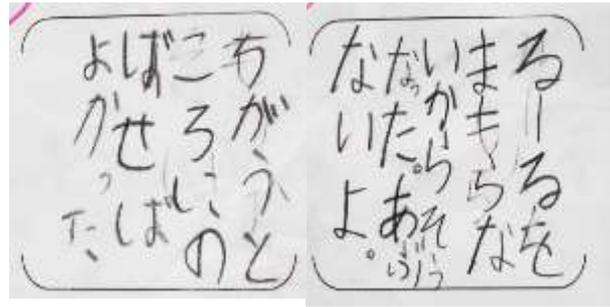


【資料1】 挿絵

う。」という人間的な弱さを引き出すために、挿絵を用い、心の揺れを視覚的に分かるようにした。【資料1】また、「つるを伸ばし続けたかぼちゃは、ひかれてしまったとき、どんな気持ちだったかな。」という共感的な発問に対しては、「痛いよ。みんなの言うことをきいておけばよかった。」「みんなごめん。」という発言があった。さらに、「かぼちゃはどこでつるを伸ばすことをやめていけばよかったのか。」という批判的な発問をした。子どもたちは「初めに自分の場所を出た時にやめておけばよかった。」や、「友だちから注意されたときにやめておけばよかった。」という考えが挙がった。この時、「でもつるを伸ばすことは悪いことではないよ。大きくなることは大切なことだよ。」と発問すると、「悪いことではないけど、迷惑だからルールは守らないと。」というつぶやきもあり、「分かっているけれどしてしまう。」という人間的な弱さに対する答えが出てきた。

○考察

- ・「分かっているけどしてしまう。」という人間的な弱さを引き出すことは難しく、挿絵だけではなく、心情円グラフを用いて視覚的に分かるような手立てが必要であった。
- ・「かぼちゃはどこでつるを伸ばすことをやめるとよかったのか。」



【資料2】子どものノート

という発問のあと、「どうやってつるをのばせばよかったのか。」とわがままをしない大切さに気付かせる工夫が必要であった。【資料2】

③ 終末段階

自分勝手な行動をやめようとする気持ちをふくらませるために、自分がよく考えてルールを守ることができた経験を振り返ることができるようにした。

そこで、教師は経験談を話した。子どもたちは、教師の説話を聞き、「先生もそんなことがあったんだ。」とつぶやきが聞かれた。しかし、自分を振り返り、わがままをせずにできたことを発表することは難しいようであった。「嫌いなものを残さずに食べたこと。」や「宿題を先にした。」など身近なことを思い浮かべることができている子どももいた。

○考察

自分事として捉え、生活を振り返らせるためには、導入時に示したアンケート結果をもう一度提示する必要があった。

(4) 検証授業①の考察

導入の段階で自分たちの生活についてじっくりと向き合う必要があった。「つるをのばすことは悪いことではないが、どこにのばせばよかったのか。」という発問では、話を振り返りやすくするための挿絵を用いたことで、「悪いことではないけど、迷惑だからルールは守らないと。」と、周りに迷惑をかけないようにできる方法があることに気付かせることができ、有効な手立てであった。

(5) 検証授業②に向けて

まず、導入を大事にして課題意識をもたせていく。次に、自分事として捉えることができるように、揺さぶりをかけた発問を考えたい。また、心情円グラフや役割演技、ねらいに迫る発問を精選して、様々な視点からの考えを出し合い、友達の見聞を聞きながら自分の考えを深めていけるような授業展開を工夫する。

〈検証授業②〉第1学年 主題名：みんなとなかよく B.友情・信頼（11月実施）
教材名：「二わのことり」

(1) 本主題の指導にあたって

本主題の指導にあたっては、友情とは、共に学んだり、遊んだりすることを通して互いに影響し合って構築される関係であり、友達と同じ気持ちになって行動すると、相手も自分も嬉しくなることに気づき、友達と仲良くしようとする心情を育てることをねらいとした。そのために、自分事として立ち止まらせた上で、物語の主人公になりきり、行動や気持ちに共感させていくようにした。そして、自分自身の生活を振り返り、友達

のことを思っていた経験を振り返り交流させるようにした。

(2) ねらいの具体化と教材解釈

学年	第1学年および第2学年	内容項目	友達と仲良くし、助け合うこと
発達段階	友達と一緒に仲良くする楽しさ、助け合うことの大切さを実感させる		
ねらい	友情とは、共に学んだり遊んだりすることを通して互いに影響し合って構築される関係であり、友達と同じ気持ちになって行動すると、相手も自分も嬉しくなることに気付き、友達と仲良くしようとする心情を育てる。【二わのことり】		
教材解釈	山奥のさびしい場所の友達の誕生日をお祝いしに行くか、楽しい音楽会の練習に行くか、友達のことを思いながらも自分の気持ちに揺れ、迷う気持ちを心の円グラフを用いて気付かせ、役割演技を行い、友達と同じ気持ちになって行動する大切さを捉えることのできる教材。		

(3) 指導の実際

① 導入段階

普段の生活の中で友達と本当に仲良くできているのか自分事として振り返らせ、本時のめあてをつかませることをねらいとした。そこで、教師は、アンケートを提示し、友達がいてよかったなと思うことやされて嬉しかったことを聞いたうえで、本当に仲良くできているのか自分自身を振り返らせるようにした。子どもたちは、「友達と一緒に遊べるから楽しい。」「一緒にお話ができるから嬉しい。」と、友達がいてよかったと思ったことを述べた。その後、教師が「本当に仲良くすることができていますか。」と問うと、「いや、ちょっと嫌なこと言っちゃったり、泣いたりしている友達もいるかな。」と自分や自分たちのクラスのことを考えた。

○考察

もっと切実感をもって立ち止まらせるために、導入で「今の自分はどうか。」「どっちの自分になりたいかな。」と自分の心に問いかける時間を十分に確保する。

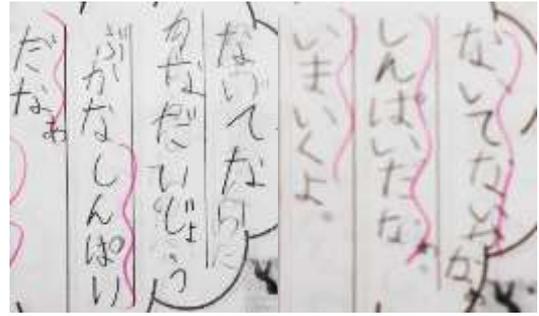
② 展開段階

みそさざいの思いに共感し、初めはうぐいすの家に行ったが、途中でやまがらの家へ行った理由を考えることで友だちを思う大切さに気付かせることをねらいとした。そこで、教師は次の2つの手立てを行った。まず、価値に迫る発問として、「そんなに心配なら、早くやまがらさんの家に行ったらいいのに、どうしていかないの？」や「みそさざいは、どんな気持ちでそっと抜け出してやまがらの家へ行ったのでしょうか。」と揺さぶりながら共感的な発問や分析的な発問をする。

次に、心情円グラフ、役割演技を用いて表現させた。心情円グラフでは、「やまがらの誕生日だし行ったほうがいだろうけど、でも、本当は、みんなと一緒に近くにある楽しそうな音楽会の練習にも行きたいな…」という人間的な弱さを引き出す。また、そっと抜け出してやまがらの家に向かったみそさざいの気持ちを考えさせるために、みそさざいがやまがらに会いに行った時の場面を役割演技して、気持ちを考え発表した。

子どもたちは、教師の「そんなに心配なら、はやくやまがらさんのおうちに行ったらいいのに、どうしていかないの？」という発問に対して、「音楽会の練習も大事だし、で

も誕生日は年に一回だから…。』と悩むような考えが出てきた。「みそさざいは、どんな気持ちでそっと抜け出してやまがらのうちへ行ったのでしょうか。」という発問では、子どもからは、「一人だから。」「今行くよ。」「寂しいよね。」といったやまがらのことを考える発言が出てきた。【資料3】

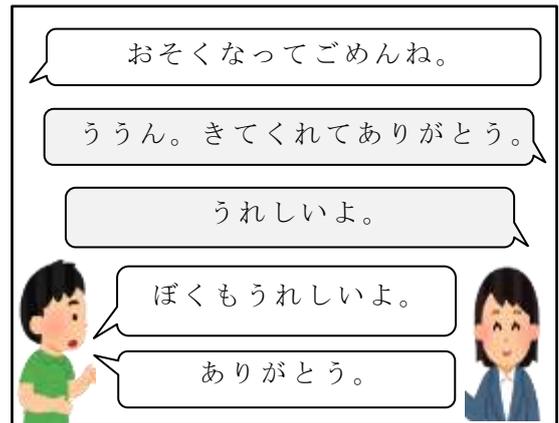


【資料3】そっと抜け出したときのきもち

役割演技では、子どもから、「遅くなってごめんね。寂しかったよね。」「喜んでくれてぼくも嬉しい。」というセリフが出てきた。【図1】

○考察

- ・ 中心場面をしぼり、「そっと抜け出した。」ことに共感させる発問に対しては「一人だから。」「今行くよ。」「寂しいよね。」といったやまがらのことを考える言葉が出てきた。
- ・ 役割演技で「どうして、今『ありがとう。』と言ったの？」や、「今、どんな気持ち？」とひとつひとつの言葉を確認し、どうしてその言葉が出てきたのか理由を尋ねること。「『ありがとう』と言ったのはどうして？」などと問う。



【図1】 役割演技

③ 終末段階

これからの生活において友達と仲良くし、助け合っていこうとする思いをもつことができるようにする。そのために、教師は、みそさざいのように、自分のしたいことがあっても、友達の気持ちを考えてできたことや、友達からされてうれしかったことを尋ねた。子ども達は、転んでしまったときに、「痛そうだね。大丈夫？」と言ってもらって嬉しかったことや、「一人で寂しそうだったから、一緒にあそぼうと言うことができた。」など自分の生活に結びつけて考えを述べていた。

○考察

- ・ 友だちがいてよかったことのアナログを提示したことによって実生活に繋げて考えさせることができた。
- ・ 相手の気持ちになって考えることや、「さみしそうだな。」「いたそうだな。」とマイナス面に共感している子どもが多かった。自分の気持ちも大事にしなから、「〇〇ちゃんが嬉しそうだから、わたしも嬉しい。」など友達と同じ気持ちになって行動することで相手も自分も嬉しくなることに気付かせることが必要であった。

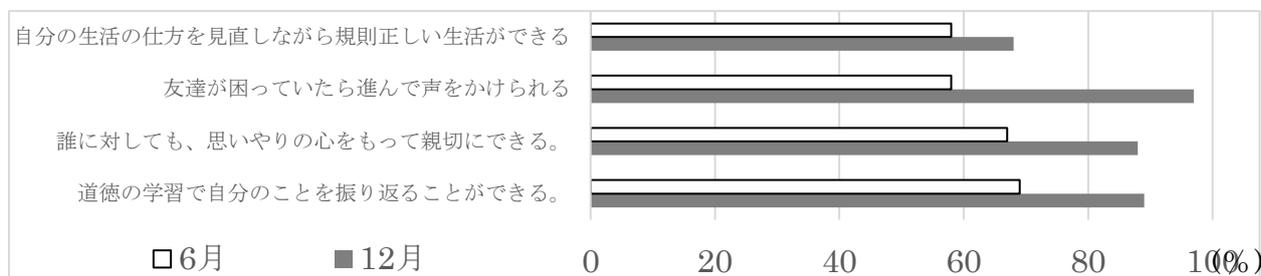
(4) 検証授業②の考察

主人公がどちらの家に行くべきか、悩む原因となる条件を書き出し、構造的に板書することで、主人公の悩みが明確になったと考える。主人公になりきっている子どもたちにとってはどうして迷っているのか考える材料となり交流を深める上で有効であった。

課題として、心情円グラフを使う場面では、揺さぶりの発問が足りず、よりよく生きたい自分を主人公に重ねるだけになってしまった。

- ・ 批判的な発問を行い、うぐいすの家の条件を十分に確認して、自分自身の気持ちを見つめ直す時間を設ける。
- ・ 「寂しそうな友達に声をかけてあげるのはすごくいいことだけど、本当はみんなと一緒に楽しい場所にいきたいな～と思ったことはない？」と揺さぶりの発問を行う。

9 研究の成果と課題



【図2】 6月と12月のアンケート比較

(1) 全体考察

図2は6月と12月に行った子どもの意識調査の結果を比較したものである。結果は上の通りである。【図2】特に、「誰に対しても思いやりの心をもって親切にできているか。」の項目では、67%から88%に伸びた。「二わのことり」の学習を通して、相手の気持ちを考えることの大切さを知り、意識したことによって伸びたのだと考えられる。「ねらいにせまる発問」では、常に主人公になりきって考えられるような発問を考えた。その時の心情を考えるだけでなく、何を考えているのか、何を迷っているのかなど発問の仕方を少しずつ変えることで、様々な面から気持ちや思いを考えることができた。また、「もし自分だったら」「あなたならどうする？」など、自分を主人公に重ねることでより自分事として考えることができていた。その後の生き方を自分で考え、実現していこうとする強い思いを引き出すことが難しかったので、自分がどんな人になりたいのかじっくりと見つめ直す時間を取るべきであった。

(2) 研究の成果(○)と課題(●)

- ねらいの具体化や教材解釈をすることによって、子どもたちに中心場面を絞ることができ、発問に繋がった。
- 多様な発問の工夫をしたことにより自分の考えにとらわれすぎることなく、友達の考えを聞き、「もし自分だったら…」と重ねて考えることができていた。
- 心情円グラフを使ったり役割演技を行ったりしたことは、自分に重ねる支援となり、子どもたちが漠然と頭の中で考えている人間的な弱さや道徳的価値を、視覚化する上で有効であった。
- 低学年では、客観的に物事をみることに慣れておらず、様々な発問を設定しようとしたが、発問の意味を理解させることが難しく、課題が残った。
- もっと子どもの人間的な弱さを引き出すような分かりやすい揺さぶりの発問をしていく必要がある。

参考文献 学習指導要領「特別の教科 道徳編」 文部科学省 平成29年
「多面的・多角的とは」 (下記 web 参考)

http://www.mitsumura-tosho.co.jp/tokubetsu_dotoku/column/qa/vol09.html